みことばを友に

2026 年 11 月 8 日発行　第 7 号　神言修道会聖書使徒職委員会

神様の招きに、遅すぎることはない

マタイ福音書 20 章 1〜16 節に記されたたとえ話では、ぶどう園の主人が、働いてもらうための労働者を探しに出かけ、さまざまな人と出会い、その人たちをぶどう園へ連れて行きます。そして最後に、ぶどう園の主人は、働いた時間に関係なく、労働者たちに同じ賃金を与えます。

このたとえ話を聞いたとき、私たちは「それは不公平ではないか」と感じるかもしれません。しかし、このたとえ話は、単に「働いた時間と賃金」について語っているのではありません。キリストが強調しておられるのは、「神様が私たち一人ひとりを、どれほど大切にしておられるか」ということです。

ここで注目したいのは、主人が人々を呼びに行った「時間」が、それぞれ異なっているということです。主人は一度だけではなく、何度も出かけて行きます。最初は「夜明け」、次に「午前 9 時」、その後「昼の 12 時」、「午後 3 時」、そして最後は「午後 5 時」です。この「時間」を私たちの人生や信仰の歩みに重ねて考えてみることができます。

第一に、夜明け（少年のころ）：最初の「夜明け」は、人生の初めの時期を表していると考えることができます。子どものころに主イエスと出会い、信仰を持つ人のことです。

第二、午前 9 時（青年のころ）：次の「午前 9 時」は、青年期を表しています。将来や人生について考え始める中で、主イエスと出会う人のことです。

第三、昼の 12 時（成人期）：「昼の 12 時」は、成人期を表しています。

仕事をし、家庭を持ち、社会の中で責任を担いながら生きている時期です。30代、40代になってから、人生のさまざまな経験を通して、主イエスと出会う人のことです。

第四、午後3時（働き盛りの時期）：　「午後3時」は、働き盛りの時期を表していると考えられます。社会の中で大きな責任を担い、仕事や家庭のために一生懸命働いている時期です。40代から60代にかけて、人生の忙しさの中で、主イエスと出会う人のことです。

第五、午後5時（人生の終わりに近い時）：　そして、最後が「午後5時」です。一日の仕事が終わろうとしている時間です。これを人生に当てはめるなら、老年期を表していると考えることができます。

私たちの中には、「人生の朝」に神様から呼ばれる人もいます。「人生の昼」に呼ばれる人もいます。そして、「人生の夕暮れ」に呼ばれる人もいます。しかし、どの時間に呼ばれたとしても、私たち一人ひとりに対する神様の愛と慈しみは変わりません。神様にとって、私たち一人ひとりの存在は、かけがえのない、大切な命なのです。ぶどう園の主人であるキリストの前では、私たちは皆、平等です。一日中働いた人も、夕方になってから働いた人も、皆、同じ一デナリオンの賃金を受け取りました。それと同じように、私たちが神様の招きに「応える時」はそれぞれ違っていても、最終的には皆、「同じ賃金」、すなわち永遠の救いという恵みを受けるのです。



だからこそ、私たちは「もう遅い」と思う必要はありません。どんな時であっても、神様は私たちを招いてくださいます。大切なのは、その招きに気づき、心を開いて応えることです。神様の招きに、遅すぎることはないのです。

（アルディー・ハヨン）

たとえ話を考える

福音書の中では、イエスの様々な「たとえ話」が登場します。その一つひとつの小さなストーリーが聞く人の想像を掻き立て、時にはたとえの中の登場人物にさえ感情移入させられるほどです。

多くの場合、イエスはたとえを話し終えた後、伝家の宝刀の如く「はっきり言っておく」と切り出し、たとえ話を通して伝えたかったことを簡潔に語ります。ダイレクトに結論からズバッと行かず、回り道をしながらゆっくりと話をする様子は、日本人にとって少なからず親近感を覚える話し方でもあります。

さて、このような回りくどい、いや失敬、聞く人にもわかりやすいたとえ話の中でも、私が特におもしろく聞き入るのは、やはり「お金」にまつわる話です。有名なタラントンのたとえをはじめ、賃金の話や、借金の話など、イエスが語るたとえ話では、お金が関わってくるものが多くあります。おそらく、イエスの話を生で聞いていた 2000 年前の人々も、お金の話となると食いつきが良かったのではないかと想像します。これがお金ではなく、他の現物だとすると、一気に興味が無くなってしまうのは不思議なものです。それは私だけだと言われると汗顔の至りではありますが、例えば賃金の話が出てくるマタイ 20 章 1 節からの「ぶどう園のたとえ」には、朝から晩まで働いた労働者と、夕方から 1 時間だけ働いた労働者に同じ賃金が支払われ、朝から働いた労働者が不平を訴えるというストーリーが展開されます。この話を聞くと、不平を言うのは何も間違っていないじゃないかと義憤に駆られることさえありますが、支払われるのが賃金ではなく、それこそぶどう園で採れたぶどうであったなら「まあ…いいんじゃないですか」と、さっき感じた義憤はどこへやらと言った感じに興味が失せてしまわないでしょうか。まるで普段は国会の話題など何の興味も示さないのに、給付金の話が出た途端、食い入るようにニュースを見始めるも最終的に給付ではなく別の方法で話がまとまると急激にテンションが下がるあの感覚に似ています。

話がそれましたが、2000 年前から現代まで変わらず「お金」が私たちの

生活にとても大切なものであるからこそ、イエスもたとえを話すときに、財産やお金という分かりやすく人間に大切なものを用いたのでしょう。しかし、たとえ話の中でお金が出てきたとしても、それがそのままお金の意味で話されるより、もっと他の大切な何かを示すものとして例に挙げられる場合がほとんどです。たとえ話は、それ自体のストーリーを現実に即して考えてみるのも面白い発見がありますが、例えられているものが何を示しているか、司祭の説教や解釈書から学ぶ以外にも、自分だったら何に当てはめられるかを色々と考えてみることも、また良い福音書の味わい方になると思います。聖書週間にあたって、主日ごとの聖書箇所、特にイエスのたとえ話に改めて注目してみてはいかがでしょうか。

（荒田啓示）

ひとくちメモ

関連して、福音書に見られる「お金」や「富」に関連するたとえのいくつかをご紹介します。

仲間の借金をゆるさない家来のたとえ（マタイ 18:21-34）

タラントン（マタイ 25:14-30）とムナのたとえ（ルカ 19:12-27）

借金をして帳消しにしてもらった二人のたとえ（ルカ 7:41-43）

愚かな金持ちのたとえ（ルカ 12:16-21）

費用の計算のたとえ（ルカ 14:26-33）

無くした銀貨のたとえ（ルカ 15:8-10）

不正な管理人のたとえ（ルカ 16:1-8）

たとえ話以外にも「やもめの献金」（マルコ 12:41-44、ルカ 21:1-4）、「金持ちの青年」（マタイ 19:16-30、マルコ 10:17-31、ルカ 18:18-30）、「皇帝への税金」（マタイ 22:15-22、マルコ 12:13-17、ルカ 20:20-26）、「徴税人ザアカイ」（ルカ 19:1-10）のような有名なエピソードもありますね。現代の私たちにあてはめるとどんなお話になるでしょうか。

「ゆるされた者として、ゆるす者へ」
― 聖フランシスコと歩む、神のあわれみの道 ―

「あなたがたは、互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。」　（コロサイの信徒への手紙 3 章 13 節）

私たちは、毎日の生活の中で、さまざまな人と出会い、共に歩んでいます。その中には、うれしい出会いや喜びがある一方で、心が傷つくこともあります。家族の言葉に傷ついたり、友人との間に誤解が生まれたり、教会の中で意見が合わなかったりすることもあるでしょう。そんなとき、「どうして、あの人をゆるさなければならないのだろう」と、心の中で思うこともあるかもしれません。

そのような私たちに、聖パウロは、「主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい」と教えています。私たちは、神さまの前で完全な人間ではありません。間違えることもあれば、知らないうちに誰かを傷つけてしまうこともあります。しかし神さまは、私たちの弱さをご存じでありながら、私たち一人ひとりを愛し、何度でもゆるし、新たに歩み出す力を与えてくださいます。だからこそ私たちも、神さまからいただいたゆるしと愛を、ほかの人へ分けていくことができるのではないでしょうか。ゆるすということは、傷ついたことを「なかったこと」にすることではありません。無理をして、すぐに忘れることでもありません。

「主よ、私の心にある痛みをあなたにおゆだねします。私の心を憎しみから解放してください」

そう祈りながら、少しずつ相手を神さまの御手にゆだねていくこと。それもまた、ゆるしへの一歩なのではないでしょうか。

アシジの聖フランシスコは、神さまの愛に心を動かされ、その愛を生きた人でした。貧しい人や苦しんでいる人に寄り添い、すべての人との間に平和を求めました。聖フランシスコが私たちに教えてくれる平和は、遠い

世界の出来事だけではありません。家庭の中に平和がありますように。教会の中に平和がありますように。職場や学校、地域の中に平和がありますように。そして、私たち一人ひとりの心の中に、神さまの平和がありますように。

では、今日の私にできることは何でしょうか。家族に「ありがとう」と伝えることかもしれません。誰かの失敗を、いつまでも責め続けないことかもしれません。自分と考え方が違う人の話を、最後まで静かに聞くことかもしれません。長い間、話していない人のために、心を込めて祈ることかもしれません。そして、自分自身の弱さや失敗をも、神さまの前に素直に差し出すことです。私たちは、誰かをゆるすとき、自分自身もまた、神さまからゆるされている者であることに気づかされます。

大きなことをしなくてもよいのです。小さな「ありがとう」。一つのやさしい言葉。一度のゆるし。

一人のための祈り。その小さな一歩から、平和は始まります。

聖フランシスコの記念日を迎える今日、私たちも、神さまに愛され、ゆるされている者として歩んでいきましょう。「主よ、わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。」

この祈りを心に抱きながら、私たちの家庭に、教会に、地域に、そして私たちの心に、神さまの平和が広がっていきますように。

（Sr. Amaria Ose, SSpS）

ひとくちメモ

アシジの聖フランシスコ

今年は聖フランシスコ没後 800 年にあたります。そこで教皇レオ14世は2026年1月10日から2027年1月10日までを「聖フランシスコ年」としました。この聖年を記念して様々な企画も行われていますので、そうした催しに足を運んだり、関連書籍を手に取ってみたりしてはいかがでしょうか。今年発行されたものには、フランシスコ会日本管区編訳「フランシスコとともに祈る」（ドン・ボスコ社）などがあります。

聖書週間のすすめ

毎年 11 月の第 3 日曜日からの 1 週間が「聖書週間」とされていますが、今年は 11 月 15 日〜22 日で、「もはや戦うことを学ばない」（イザヤ 2・4）をテーマとしています。例年、中央協議会（https://www.cbcj.catholic.jp/）からお知らせが出され、小冊子『聖書に親しむ』の PDF 版も同ページから見ることができます。ここでは、今年のテーマにちなみ、「イザヤ」について少しだけご紹介したいと思います。

預言者

イザヤは「預言者」の一人に数えられます。旧約聖書に登場する預言者たちは自身の言動や存在を通して、神の言葉をイスラエルの人々に伝える役割を果たしました。イスラエルの神は「語る神」であるという確信に基づく、「神の言葉を預かっている人」という意味の「預言者」であって、未来に起こることをあらかじめ言い当てる「予言者」ではありません。もっとも預言者も将来のことについて語ることがあります。預言者たちは特に危機的状況にあるときに登場し、人々に神の民としてのあり方を求めて警告を発しました。権力者である王に対して苦言を呈することもたびたびでした。

時代背景

「イザヤ書」は、実は 3 つの時代の預言が「イザヤ」という人物の名前のもとに 1 つに集められたものだと言われます。1〜39 章は紀元前 8 世紀後半にエルサレムで活動したイザヤ、40〜55 章はバビロン捕囚時代末期の第二イザヤ、56〜66 章は紀元前 500 年以降の第三イザヤです。

栄華を極めたソロモン王の死後、古代イスラエルの王国は南北に分裂しましたが、第一のイザヤの時代、南と北の王国は断続的に争いつつ、アッシリアとエジプトという周辺の二大国の間にはさまれて「一方に支配されないよう他方に頼る」仕方で生き残ろうと、大きく揺れ動いていました。そして北のイスラエル王国が隣国シリアとの軍事的同盟でアッシリアに対抗しようとしていた頃、イザヤは南のユダ王国に登場しました。

メッセージ

このような戦乱の時代、祖国が危機にさらされている状況にあって、イザヤは自身の罪が神によって清められ、立ち上がらせられたという個人的体験から、預言者としての召命を得ました。そして同じ体験を人々にもさせて神に立ち返らせようとし、「頼みにするべきは武器や戦力ではなく、主なる神のみだ」と語りました。聖書週間のテーマである「もはや戦うことを学ばない」は、主による裁きを受けてイスラエルの民も諸国の民もすべての国が神の言葉と教えに従うようになるとき、平和が訪れるという救いの預言です。

価値観が多様化し、様々な争いを抱えて揺れ動く現代を生きている私たちにとっても、何を信じてどこに信頼を置いて日々を歩んでいくか、どのようにして周りの人や世界中の人たちと心を通わせるのかが問われています。

紙面の都合により掲載できなかった記事をウェブページにて公開しています。「パウロと奴隷制度」という記事で、新約聖書の「フィレモンへの手紙」の解説になっています。この小冊子とあわせてお読みいただけると幸いです。

忙しい毎日の中で、時間を取ってゆっくりと腰を落ちつけ、頭を休め、肩の力を抜いたときにこそ思いがいたることがあります。聖書のみことばに向き合う場合も、肩ひじ張らず、あまり難しく考えずに素直に心を向けると見えてくるものがあるかもしれません。

「神の言葉」を名前としていただいている、私たち神言修道会の聖書使徒職委員会ではウェブサイトを開設し、毎主日の聖書朗読箇所についての黙想のヒントなどを掲載しています。どうぞご活用ください。

神言会聖書使徒職委員会ウェブサイト
http://svdjpba.net/

2026年11月８日 発行
カトリック神言修道会 聖書使徒職委員会